

論壇

農林環境専門職大学は農学教育に一石を投じることができるか

静岡県立農林環境専門職大学学長

鈴木滋彦

はじめに

農林業分野の専門職大学が2020年4月、静岡県に県立大学として誕生した。開学して4年目を迎え、これまで短期大学部は2回卒業生を世に送り出し、四年制大学は1年生から4年生までが揃ってフル稼働状態を迎えている。コロナ禍のもと、初めての入学式は保護者ナシで規模縮小、開学記念式典は延期となり、評議会で最初に手掛けたのがコロナの緊急対策委員会の設置だったことを思うと、輝かしい船出とは言い難い。

しかしながら、大学設置の趣旨は輝かしいものであると自負している。農林業の基本となる栽培・生産技術に加えて、加工・流通・販売が分かり経営のできる人を育てることを第一の目標とし、さらに、農山村の伝統文化、環境を学び地域を支える将来のリーダーを育てたいというのが第二の目標である。経営が分かり地域のリーダーとなる人材を育てるという大きな目標を掲げている。

本稿では、新しい教育制度としてスタートした専門職大学制度について紹介し、あわせて、農林業系の使命を背負って開学した本学の特徴と設置の経緯について紹介させていただきたい。また、新制度と新大学の紹介を通して、農学教育における専門家教育について考えてみたい。

1 指導者、後継者から経営者へ

本学の前身は静岡県立農林大学校で、全国に40余ある公立の農業系専修学校の一つである。その歴史は古い。明治26年、明治政府は国立の農事試験場を設立する際に見習生（けんしゅうせい）制度を導入した。農業技術者の育成制度である。全国7か所（東京、仙台、金沢、大阪、広島、徳島、熊本）に開設された試験場に、地方の農事改良指導者を志す者から選抜された各6名（合計42名）が配置された。おそらく、当時の優秀な人材が登用されたものと推察される。ちなみに、静岡で「柑橘の父」といわれる高橋郁郎先生はこの制度の出身であり、後年、静岡県柑橘試験場の開設に尽力され初代場長を務められた。

国の制度の発足から6年後の明治32年、各府県に農事試験場の設置を促す国庫補助制度が制定された。国が先に試験場制度を立ち上げ、6年後から府県に広げたのだ。静岡では政府の方針にいち早く呼応して翌明治33年（1900年）農事試験場を開設した。試験場の開設と同時

に、国に倣って見習生制度を導入し、農業技術者・農事改良指導者の育成を始めた。これが本学の起源となる。見習生制度は「農事に関する学芸・実務に精通した実務者の養成」を謳っている。ここでいう学芸とは学問すなわち科学のことであり、実務とは技術とその応用力のことを指していると思う。当時の資料からは農業技術者を指導者として育てようとしたことが理解できる。まだ国内に高等教育の制度が普及する前のことであり、今日に当てはめるならば大学院レベルの教育に相当するものと筆者は考えている。

この見習生制度は、時代の要請に応じて名称を変えながら明治、大正、昭和と引き継がれ、国および県の農林業施策を設置根拠とする教育が行われてきた。静岡県の場合では昭和 49 年に農業短期大学校、平成 11 年には農林大学校と名称を変更した。また、平成 17 年には専修学校専門課程として認められている。

明治に始まった技術者・指導者の人材育成機能は教育制度の進展とともに、自営就農の後継者の育成へと変化し継続された。高校進学率が上昇し、大学への進学も増加して、中等教育および高等教育の様相が戦後大きく変化した。高度経済成長の時代には産業構造が大きく変わり、農林業を取り巻く社会環境が大きく変化したことは誰もが感じ取っている。そうしたなか、最近では自家就農型の後継者が大きく数を減らしていることもご承知の通りである。

本学の設立にあたって、これからの農林業に求められるものは何かを改めて問い直すことになった。その結果、栽培技術、生産技術に加えて、加工・流通・販売そして経営のできる人が必要だろうという結論に至った。生業の後継ぎではなく、農林業を産業として支える人材の育成と言い換えることもできる。明治 33 年に始まった人材育成の歴史は脈々と引き継がれてきているが、目標は変わりつつある。「指導者」から「後継者」、そして「経営者」と変化したと言えよう。

開学の令和 2 年 (2020 年) は静岡における見習生制度の起点となる明治 33 年 (1900 年) から数えて 120 年の節目に当たる。偶然であるが、庚子 (かのえ・ね) の還暦を二巡するめでたい年に新たな歴史を始めることになった。

2 専門職大学

専門職大学の謳い文句は「高度な実践力」と「豊かな創造力」である。優れた専門技能をもって、新たな価値を創造することができる職業人材の養成が求められると説明されているが、筆者は「大学で行う職業教育」と読み替えている。2017 年に、専門職業人の養成を目的とする新たな高等教育機関として、「専門職大学」と「専門職短期大学」の制度を設けることが決まり、2019 年に施行された新しいタイプの大学である。ファッション、IT、国際、医療、看護、観光など対象分野は幅広く、あらゆる産業を対象としている。制度化初年度の 2019 年には 3 大学が開学し、現在 22 の大学がある。本学はその中であって、全国初で唯一の農林業系の専門職大学であることを「うり」にしてきた。開学から「全国初で唯一」と宣伝してきたところ、「全国初」は今後も変わらないが、「唯一の」といえるのは今年度までとなった。嬉しいことに来年度 (2024 年度) からは、山形県に東北農林専門職大学が開学する。これまで一

校で孤軍奮闘の状況が続いていたところなので、二つ大学があれば協力して世の中に職業教育の情報発信ができるのではないかと期待している。

専門職大学の創設は55年ぶりの大学制度改革であると言われてきた。学校教育法の大学体系に新しい類型が創設されるのは、1964年に短期大学制度が恒久化されて以来、55年ぶりであり、長い間変化がなかったものが動いたという意味で、「55年ぶり」と強調されている。余談だが、短期大学は1964年が始動ではなく1950年からスタートしている。開始時には暫定制度として運用され、「正式に制度化」されたのが1964年なので、短大制度の恒久化以来と表現されている。

さて、新しく制度化されたばかりであるため専門職大学制度はまだ知名度が低く、説明に手間取ることが多い。大学名に冠する「専門職」という言葉が、専門学校との違いを分かりにくくしているようだ。「学校教育法第一条に規定されるいわゆる一条校である」などと説明を加えなくてはならない状況が続いているのは残念である。欧州の事例を参考にして、フランスのグランゼコール (Grandes Écoles) やドイツの専門大学 (Fachhochschule) などを引き合いにだすことで、特徴を説明することも多い。

3 職業教育

静岡県立農林環境専門職大学は英名を Shizuoka Professional University of Agriculture (SPUA) という。本学が大学名に使う Agriculture の意は広く、「農」と「林」と「環境」をこの一語に込めている。さて、専門職をどう呼ぶかについては多くの方が気にされていたようだ。結果的には、専門職には professional の語を充て、専門職大学は Professional University と呼ばれる。このことに異論はなく、むしろ歓迎している。国内では「専門職大学」という表現よりも、「プロフェッショナル・ユニバーシティ」とカタカナで呼んだ方が、大学の特徴を理解してもらい易いように感じているからだ。

ところで、本年3月、インドネシアのボゴール農科大学 (IPB) との間で覚書を調印することができた。それを機に、教育・研究はもちろんのこと、職業教育を通じた人材育成に関する連携について打合せを継続している。欧州とのチャンネルも強化しようとして検討しているところである。そんな時に使うのは、vocational であり、professional ではない。高等教育で、そして大学で vocational education をどのように連携・協力して進めましょうか、といった具合である。

ボゴール農科大には Sekolah Vokasi (Vocational School) と呼ばれる学部があり、大学で職業教育を行っていて学生の人気もある。コースによっては普通の学部より倍率が高い。われわれは Sekolah Vokasi を「専門職学部」と呼び、同類の教育意識をもって学生の交流等を検討している。インターンシップの進め方などが共通のテーマである。また、フランスのグランゼコール (Grandes Écoles) やドイツ系の専門大学 (Fachhochschule) の同業者と教育に関する話をした時も、vocational を多用している。ここで、国内では professional と言っているのに、海外向けには vocational を使うとは、その心理やいかに、と自問してみた。

海外の人々と語るときには vocational がお互いの理解を得るのに適語であると思うし響きも良い。しかしながら、国内で vocational を使うと、例えば vocational education は「職業教育」と訳され意味合いが少し変わるように感じている。この違和感は何か。結論的に言うと、高等教育に携わる人々の中に職業教育を低く見る傾向があることに由来しているのだろう。ひょっとすると教育関係者だけでなく、一般社会の中にもそのような感覚があるのかもしれない。

事実、中央教育審議会が2016年、「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化」に関して審議した特別部会においてもこのことに触れている。「我が国では、社会全体を通じ職業教育に対する認識が不足しており、ともすれば、普通教育より一段低く見られる社会的風潮がある」ことを懸念している。そして、新しい制度の設計に当たっては、「実践的な職業教育に最適化したより工夫された仕組みを創設し、その社会的評価を高めていくことが望まれる」と論じている。つまり、世の中は職業教育を低く見ているので、専門職大学制度を作ろうとするならば、教育の中身をしっかりとしたものにしたうえで、社会から高い評価を得る努力が必要だと述べている。「専門職大学は実績を上げて高い評価を得なさい。それが、職業教育の評価を高めることに繋がるであろう」と言われているようにも読める。

新しい大学制度であるため、認知度が低いことはやむを得ないとしても、職業教育の意義をあらためて説明しなければならぬ状況はやや残念である。医学部や看護学部、教員養成系の教育学部などは職業教育を行っているともみることできる。工学部でも部門によっては職業教育に近いことをやっている。最近では大学教育にキャリアデザインが導入されていて、大学教育全体が職業を強く意識するようになってきている。あらためて、大学における職業教育の意味を考えてみてほしい。

4 専門職大学の教育の特徴

2017年5月24日の学校教育法の改正により誕生した専門職大学の特徴は次の5つにまとめられている。(1) 授業の3分の1以上は実習・実技、(2) 理論と実践をバランスよく学ぶ、(3) 長期の企業内実習で現場を体験できる、(4) 他分野も学べ、応用力が身に付く、(5) 学位がとれる。

特徴の一つは授業の1/3以上が実習や演習で構成されることである。このことは、大学関係者には驚きの数字かもしれない。2022年度の大学設置基準等の改正により1単位に必要な授業時間数の扱いに弾力化が図られてはいるものの、講義が15時間で1単位としたとき、実習、実験、実技は2~3倍の時間を定めているケースが多い。実習や演習が多いということは学生がしっかり学ぶことはもとより、教員も学生と接する実働時間が多くなることを意味している。最近の「農学部」では研究に忙しくて、農場実習や演習林実習に十分な時間を割くゆとりが無くなっているのではないかと感じている。また、専門職大学では講義、実習、演習など全ての授業が40名以内で行われていることも、誇るべき特徴である。本学の場合、学生がコースに分かれると10名から20名を対象とした授業も多くなり、少人数の本格的な教

育を実践している。2004 年来、大学評価制度で問われている教育の質保証や単位の実質化の論議が、専門職大学制度の設計に際して 40 名の制限を求めたのではないかと推察している。

また、教員の 40%以上は実務家教員であることが定められている。正しくは設置基準で必要とされる教員数の 4 割以上である。実質的な定義や運用は別稿にゆずるが、実務家教員とは概ね 5 年以上の実務経験と能力が求められる教員である。理論と実践をバランスよく学ぶことを担保する仕組みなのかもしれない。また、そのうち 1/2 以上が研究能力を有することが求められている。筆者は、実務家教員のことを「畑も耕せるし論文も書ける」教員と説明している。

さて、(3) 長期の企業内実習は専門職大学の最大の特徴かもしれない。「臨地実務実習」と呼ばれる長期のインターンシップで 600 時間、4 か月が充てられる。本学の場合、2 か月を栽培や生産技術の習得を目的とし、次の 1 か月をマネジメント、最後の 1 か月で経営戦略を学ぶよう構成されている。短期大学部では約 2 か月の「企業実習」が設計されている。臨地実務実習では学生を法人等をお願いするのだが、大学と受入先が協力して人材育成を行うことが特徴であり、したがって、「普通のインターンシップ」よりも受入先の負担も大きいし責任も重い。この専門職大学固有の制度を説明してご理解をいただいた受入先の中から、そこへ配属する学生の希望や特徴を勘案（マッチング）することになるので、新制度の運用開始後しばらくは、教員集団にとっては大変な作業となっていたし、現在も努力が続けられている。

大学教育は、古くは「教養部と学部」教育に象徴されるように、一般教養と専門に大別されている。それに対して専門職大学では 2 区分ではなく、「基礎」「職業専門」「展開」「総合」と 4 区分化されたことも特記事項であろう。4 区分に制度化したことの評価は今後教育学者をお願いするとして、当事者としてはこの中で「展開科目」という括りが実は興味深い。特徴の (4) 他分野も学べ応用力が身に付く、に対応しているものと思われる。本学では、「農山村デザイン演習」を必修として哲学、食文化、ツーリズム、コミュニティなどが並ぶ。農山村の伝統・文化および地域社会をテーマにしている。

(5) 学位が取れることは大学だから当然なのだが、このことを「高く評価する」と明言される方もいる。

5 「Agrifore」の紹介

開学に先立って、農林環境専門職大学という名は長いのでニックネームが要るだろうということで公募したところ、800 を超す応募があり、「アグリフォーレ」に決まった。商標登録も済ませた。アグリが「農」を意味することは自明であるとして、フォーレは「林」に由来するとの論に加えて「前に進む」感じもあり好評であった。蛇足ながら、SPUA も商標登録されている。

その Agrifore、すなわち本学は四年制大学（生産環境経営学部）と短期大学部（生産科学科）のふたつの大学から成り立っている。入学定員は四大 24 名、短大 100 名であり、在学生総数 300 名の極めて小規模な大学である。小規模の利点を活かして、コロナ禍を対面授業で

乗り切ることができた。専任教員は45名を擁しており、学生数に対する教員の比率はきわめて高い。これは、小さい大学ではあるが、栽培、畜産、林業をカバーする幅広い分野での人材育成を目標としていることに関係している。

一学科を教育単位としており、DP（卒業認定・学位授与の方針）、CP（教育課程編成・実施の方針）は学科で定めている。一学科を教育単位としつつも、学生は途中で栽培コース、畜産コース、林業コースに分かれて履修する。栽培を希望する学生が最も多く、栽培コースはさらに「野菜」「花卉」「茶」「果樹」の4分野に分かれて専門的な知識を学び技術を身に付けていく。畜産コースでは、酪農・肉牛などの「大家畜」と養豚・養鶏などの「中小家畜」の2分野に分かれて学ぶ。DP、CPとして表明しているとおり、教育単位である学科の共通した教育理念のもとで農林業を産業として支える人材育成を目的とした教育が行われている。専門分野の数は、栽培は4、畜産は2、林業は1分野となっており、大学の全体像を理解するにはこの比率が分かり易い。さらに細かく見ると、「野菜」の分野はイチゴ、トマト、メロン、露地野菜に分かれるなど、多彩な専門家が必要になる。学生数に比べて多くの教員数が必要となる所以である。

また、県内の農業系研究施設と強い連携を有していることが本学の教育上の特徴といえよう。野菜、花卉は隣接する農林技術研究所がその分野の研究機能をもっていて、学生の実習に際しては協力関係が得られている。果樹と茶はその名のとおり、果樹研究センター（静岡市）、茶業研究センター（菊川市）が担っており、学生は実習やプロジェクト研究などでお世話になっている。森林・林業研究センター（浜松市）が林業コースと関係が深いことは言うまでもない。同様に、畜産コース「大家畜」の学生は畜産技術研究所（富士宮市）で実習を行い、養豚・養鶏の「中小家畜」分野の学生は同名の中小家畜センター（菊川市）で学ぶ。本学の前身である農林大学時代には、学生は関連する研究機関に一年間分属して講義を受けると同時に卒業研究を行っていて、県の試験研究機関には分校が附置されていた。制度が変わった現在でも、当時の協力関係は維持されている。幅広い支援が得られるのは県立大学の強みかもしれない。

専門性に加えて、加工・流通・販売と経営が分かる人材を育成すること、経営マインドを身に付けるための教育、カリキュラムの設計は本学開学時の最大の課題であり、今でも一番の課題である。マーケティング、経営、労務、会計などの科目を並べれば叶うというものではないことは分かっている。「高い専門性と俯瞰的な視点」の両方をかなえるために心がけていることがある。幸いにして、静岡には多様な産業があり、製造品出荷額全国四位の技術力・ものづくり県でもある。農林業が内にこもることなく、多様な産業の皆様の研究力、技術力、経営力に学ぶ姿勢をもっていきたい。

おわりに

余談になるかもしれないが、本学の3コースを「農業」「林業」「畜産」と言わず、「栽培」「林業」「畜産」と称したわけを説明したい。農学部の「農」と農学科の「農」の違い、ある

いは学術用語の分野 (area) と分科 (discipline) の両方に「農学」が現れることは、農学関係者には阿吽の呼吸で何の問題も無いのだが、広義と狭義の違いは世の中一般には分かりにくいらしい。設置審査の過程でこれが思わぬ壁となって立ちはだかった。そこで、狭義の方を「栽培」と呼ぶことで壁を低くするよう努めた。

さて、大学で職業教育を行う際の一番の課題は「どこまで枠にはめるか」だと考えている。優れた専門技能、専門技術を身に付ける努力、あるいは特定の方向に集中することは、逆に、将来を狭めるのではないかと懸念があるからだ。国家資格と結びついた教育の場合、たとえば医師、看護師、教師などは教育内容を組み立てやすいように見える。しかし、農林業の場合、産業構造が将来大きな変化を見せる可能性があり、どう考えたらよいものか、識者のご助言をいただきたい。

本稿の英語表題を「Can SPUA create a stir in agricultural education?」とする。また、内容は大学紹介の参考資料 1) と重複する箇所があることをご容赦願いたい。

最後に、開学に向けて静岡県が設置した基本構想策定委員会 (2017 年)、基本計画検討委員会 (2018 年) の会長を本アカデミー会長の生源寺先生がお務めになられたことを、謝意を込めて付記したい。

参考資料

- 1) 『農林業の魅力と専門職大学』鈴木滋彦編、筑波書房、2022